

富津市 東大和田城山砦跡

—一般国道465号埋蔵文化財調査報告書—



平成15年9月

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、千葉県文化財センター調査報告第465集として、一般国道465号の拡幅工事に伴って実施した富津市東大和田城山砦跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、中世の砦跡に付隨する空濠が検出され、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成15年9月30日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 清水新次

凡　　例

- 1 本書は、千葉県土木部による一般国道465号拡幅工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県富津市東大和田字堀切275ほかに所在する東大和田城山砦（遺跡コード226-016）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査から整理作業まで、南部調査事務所長鈴木定明の指導のもと、研究員城田義友が下記の期間に実施した。

　発掘調査　平成15年6月2日～平成15年7月11日

　整理作業　平成15年7月14日～平成15年7月31日

- 5 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化財課、富津市教育委員会、千葉県君津土木事務所天羽支所、林喜一氏の御指導、御協力を得た。
- 6 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

　第1図 国土地理院発行 1:25,000地形図 「鬼泪山」 N1-54-26-1-2 (横須賀1号-2)

　第2図 富津市役所発行 1:2,500地形図 No48 IX-ME 82-3

　1:2,500地形図 No49 IX-ME 82-4

　1:2,500地形図 No55 IX-ME 92-1

　1:2,500地形図 No56 IX-ME 92-2

- 7 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。測量値については日本測地系を使用した。

目 次

Iはじめに.....	1
1 調査に至る経緯.....	1
2 遺跡の位置と環境.....	1
II調査の概要.....	4
1 調査の方法と経過.....	4
2 検出された遺構.....	5
3 遺跡の現況.....	9
IIIまとめ.....	11
報告書抄録.....	卷末

挿 図 目 次

第1図 東大和田城山砦と周辺の遺跡.....	2
第2図 調査区割の概略とグリッド設定.....	3
第3図 東大和田城山砦と周辺の地形.....	4
第4図 SD-001平面図・土層断面図.....	6
第5図 III B 区出土地蔵菩薩立像台座の刻書.....	7
第6図 調査区域の現況地形図.....	9
第7図 東大和田城山砦推定復元図.....	10
第8図 東大和田城山砦植生分布図.....	11

図 版 目 次

図版1 調査区遠景、調査区からの展望（主郭方向）	
図版2 調査区からの展望（南側遺構群、常城砦方向、関方向）	
図版3 調査区からの展望（峰上城方向）、SD-001	
図版4 SD-001	
図版5 現道北側法面、現道南側法面、堀5（空堀）の現況	
図版6 堀5（空堀）の現況、遺跡内に所在する祠	
図版7 遺跡内に所在する祠、III B 区出土地蔵菩薩立像	

I はじめに

1 調査に至る経緯

千葉県土木部は、一般国道465号の東大和田地区において、車両と歩行者の交通安全対策として、道路拡幅工事を計画した。そこで工事区間内の埋蔵文化財の取扱いについて関係諸機関と協議した結果、記録保存の措置を講ずることになり、平成15年6月2日から財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

2 遺跡の位置と環境(第1図)

東大和田城山砦は富津市東大和田字堀切を中心とする地域に所在する。本遺跡の所在する富津市は房総半島の南西部にあり、君津市、鴨川市、安房郡鋸南町と境を接し、本遺跡は富津市内の代表的な河川である湊川の流域に位置し、旧安房国との国境まで最短で10kmほどの旧上総国南西端付近の上総國天羽郡に比定されている地域にある。湊川は富津市と鴨川市の境界付近に源を発し、著しく蛇行して多くの支流を集めながら北上するが、中流域にかかる頃に徐々に西よりに流路を変え、上総湊付近で東京湾に流入する。本遺跡は高岩山西麓を源流として西進し、中流域付近の湊川に合流する支流である高岩川の、まさに合流地点付近の右岸に位置する。地形的には、鹿野山から南に延びる多くの尾根筋のうちのひとつの末端付近にあたり、湊川および高岩川に流下する細流に開析された谷に東西両端を挟まれた急峻な斜面と、狭い尾根をもつ丘陵状の地形を呈している。なお、遺跡のほとんどの部分の現況は山林である。

周辺の遺跡はそれほど多くはなく、ほとんどが古代～中・近世のものであり、ここでは本遺跡との関連が考えられる中世の遺跡についてのみ記す。まず、城館跡では本遺跡の約1km南には峰上城跡(3)、約0.7km西には常城砦跡(2)があり、いずれも本遺跡からはっきりとその姿を見ることができる。それぞれ所在地は、前者が上後字要害から環、後者が閑尻字苗代台である。峰上城跡については平成3年度に当センターで測量調査を実施しており、主郭や堀切、曲輪など多くの遺構が良好な状態で残されていることを確認した^(※1)。また天文年間には、当時この地域を支配した真里谷武田氏の内紛の拠点となったという記録がある^(※2)が、築城年代や廃絶年代についてははっきりしない。後者は未調査だが、峰上城跡の報文^(※3)中で触れている。それによると台地上には段差を持つ郭、東側斜面にはいくつかの腰曲輪があり、大規模な空堀が残されているほか、井戸が2箇所確認されているという。墓跡では常城やぐら(4)、天神台やぐら(5)、恩田やぐら(6)、小志駒やぐら(7)などが挙げられ、各1基確認されているが、いずれも状態はあまりよくないようである。そのほか、宮花輪遺跡(8)は寺尾字原畑に所在し、平成元年度に県営圃場整備事業に先立ち(財)君津都市文化財センターが発掘調査を実施した^(※4)。調査区内で掘立柱建物跡5棟が検出されており、出土遺物から15世紀頃の集落跡と考えられる。

(※1) 高梨後夫 1993 「千葉県中近世城跡研究調査報告書 第12集 ~峰上城跡測量調査報告~」(財)千葉県文化財センター

(※2) 1975 「扶元僧都記」「神道体系」神社編20 神道体系刊行会

(※3) 梶村修司 1990 「宮花輪遺跡」(財)君津都市文化財センター



第1図 東大和城山砦と周辺の遺跡 (S=1/25,000)

II 調査の概要

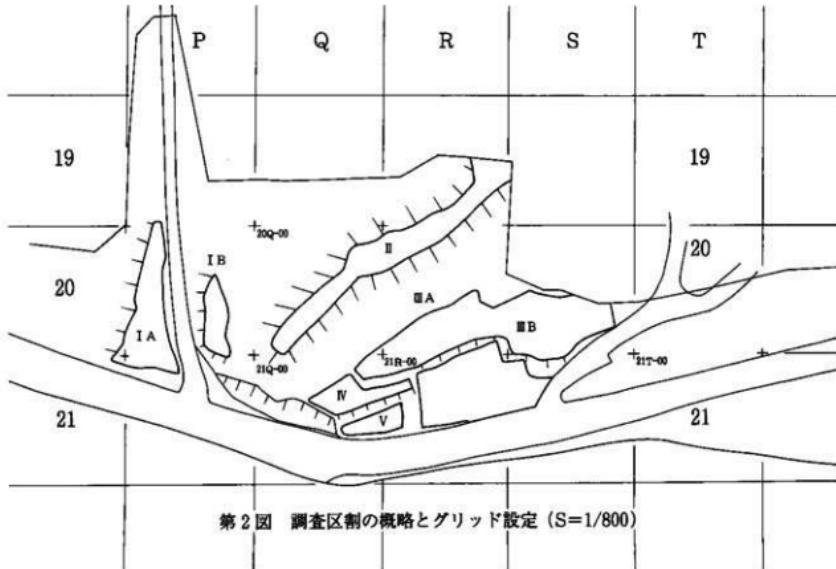
1 調査の方法と経過

本遺跡の総面積約12,000m²のうち、本事業に伴う調査対象面積は図上で3,600m²である(第2図)。ただ、遺跡の性格上その大部分が最大斜度70°に及ぶ急斜面であり、その部分に遺構が存在する可能性は希薄であるため、平坦面部分の500m²について発掘調査を実施し、それ以外の急斜面部分については地形測量で対応することになった。

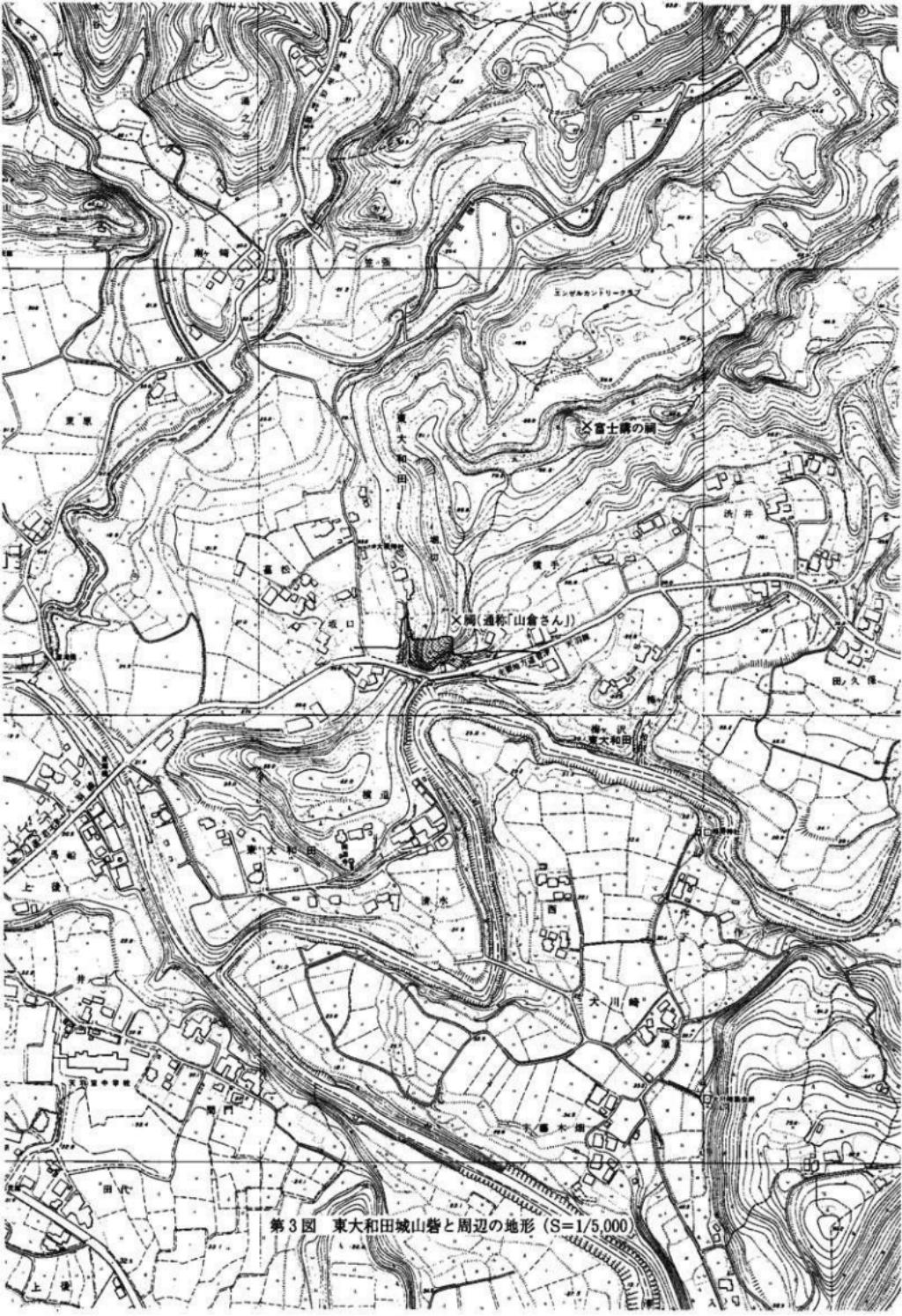
今回の調査はまず、調査区全体について業者委託による地形測量を実施したのち、日本測地系に基づいて基準点測量を行ったが、遺跡全体に座標値を適用するため、調査区内東西方向西よりP～S、南北方向北より18～21まで20mごとに方眼杭を設定した。これにより調査区を一辺20mのグリッドで区画し、各グリッドは18P, 19Q, 20R…というようにその北西隅にある杭の名前で呼称した。その中をさらに東西10×南北10の計100の小グリッドに区画した。小グリッドは東西方向西から00, 01, 02…、南北方向北から00, 10, 20…の順に割り付けたため、北西隅が00、南東隅が99となる。

調査区は大きく斜面西側(I), 尾根上(II), 斜面東側(III～V)の3箇所に分けられる。そのうち尾根上の平場(II)については作業者の転落の危険性があり、また転落防止柵等を設置するには幅が狭すぎるため、発掘調査は断念し、ボーリングステッキによる探索のみを行った。その後、斜面は東側調査区の一部については重機による表土の除去を行ったが、重機が進入できない斜面西側調査区と東側調査区の一部については手掘りで表土を除去した。検出された遺構の精査と記録、写真撮影の終了後、器材の撤収、調査区の埋め戻しを行い現地での発掘調査を終了したが、補足調査として、調査区周辺の踏査を実施し、概要を記録した。

現場での作業終了後、引き続いて記録整理、トレース、挿図・図版作成、原稿執筆、校正、報告書刊行、移管整理を行い、本事業に係るすべての業務を平成15年度中に完了した。



第2図 調査区割の概略とグリッド設定 (S=1/800)



第3図 東大和田城山砦と周辺の地形 ($S=1/5,000$)

2 検出された遺構

今回の事業区域内には、尾根上の狭い平坦面と、斜面下部に一見腰曲輪状に見える若干の平場が認められるほかは、ほとんどが斜度50°を超えるような急斜面であるため、斜面下部の平場のみを発掘調査の対象とした。しかし、すべての平場が近世以降に墓地あるいは家屋を建設するために造成されたものであり、砦に付随すると考えられる腰曲輪ではなかった。ただ、東側斜面の中腹より砦を巡るものと考えられる空堀を検出することができた。

(1) 概要(第3図)

I区(A・B)

調査区西側、20Pグリッド～21Pグリッドに所在する。北側にある民家の進入路を建設するために中央部分が南北に切通し状に削られている。現況での標高は、進入路の西側(I A)で39m～41m、東側(I B)で44m～45mと4m～5mもの差があり、西側については現況で地山の砂層が露出てしまっている。進入路の東側については表土が薄く、5cmほど下げるとき地山の砂層に達した。いずれも遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。

II区

丘陵の尾根上、20Qグリッド～19Rグリッドに所在し、東西両側は調査区域外にのびている。現況での標高は、57m～60mである。現状での幅は最大で3m、狭いところでは1.5m程で危険であるため表土除去は行わず、1.5mのボーリングステッキによる地下探査を行ったが、明瞭な遺構は検出できなかった。ただ、平場の中央やや東側に落ち込みが認められており、堀切となる可能性がある(第7図:堀9)。

III区(A・B)

いずれも調査区中央付近～西部、20Rグリッド～20Sグリッドに所在する。調査区東側斜面のほぼ中位の高さにあたる。上下2段に分けられ、上段をIII A、下段をIII Bと仮称する。現況での標高はIII Aの西部が約46m、東部では約48m、III Bの西部が約42m、東部では約43mである。

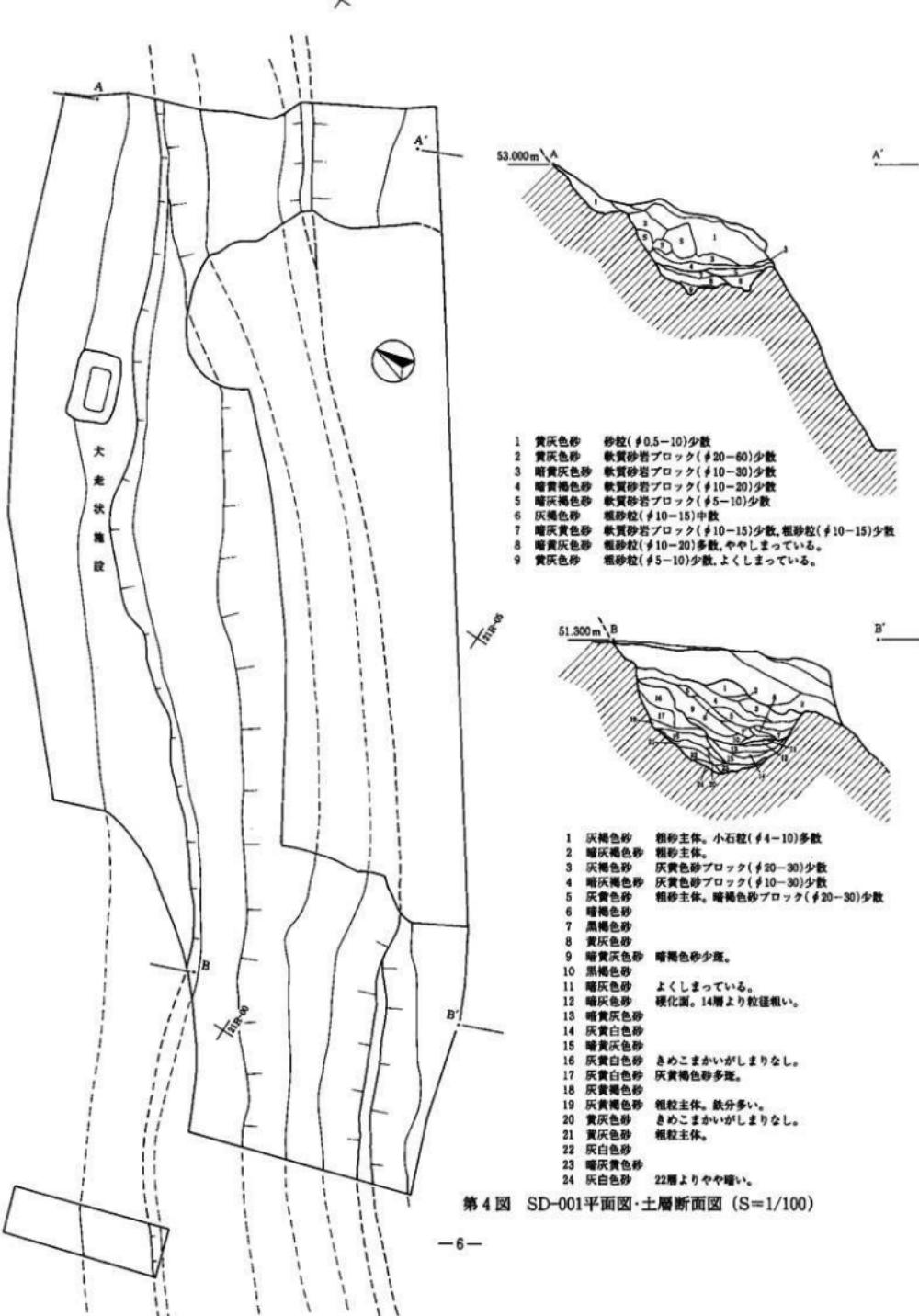
まずIII Aは、表土の厚さはいずれも5cm程度で、それを除去すると再堆積の砂層が現れたため斜面と直行方向にサブトレチを2箇所設定して掘り下げてみたところ、西側については検出面下2m程で未凝結砂岩の地山層を検出した。これ以上は斜面崩落による再堆積で、少なくとも2回の崩落の痕跡が見られた。平場はこの崩落土を削って造成されている。時期は不明だが、近世の陶磁器類が出土することからこれ以前であると考えられる。また、この部分から斜面に並行する溝跡と犬走状の平場が検出されたが後述する。III Bは、表土の厚さが10cm程度、その下に斜面崩落による再堆積土が1m程あり、これを除去すると未凝結砂岩の地山層が現れる。近隣住民の話によると東半部には以前は民家が建っていたとのことで、その際に再堆積土を削って造成したものと考えられる。東半部の再堆積土中から享保三年(1718)銘の地蔵菩薩立像が5個分出土した(第5図、図版7-3)。

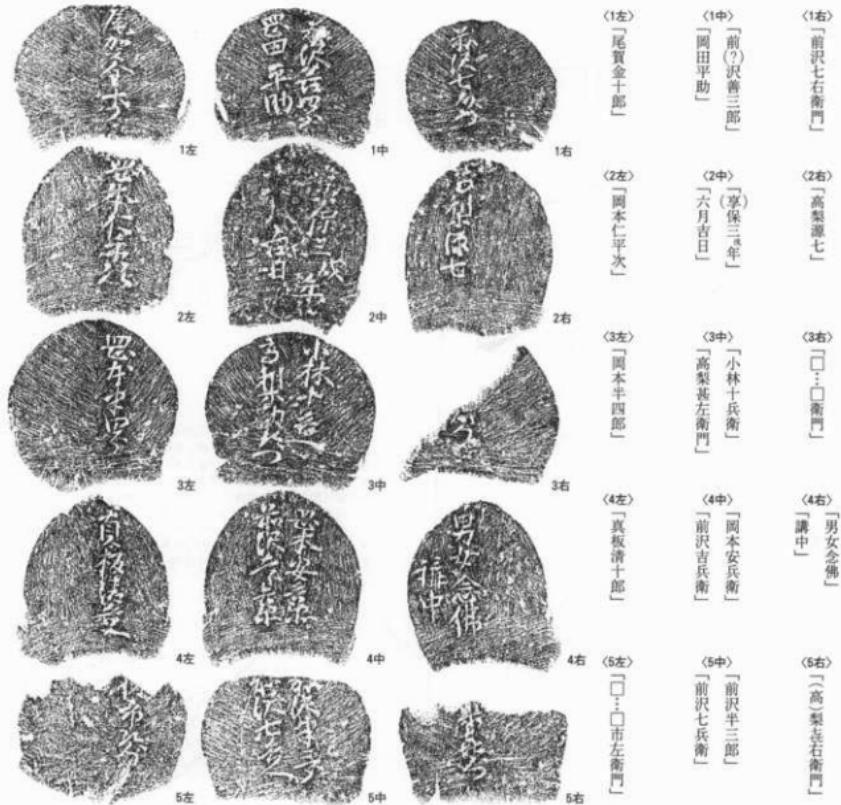
IV区

近隣住民の話によると、近年まで墓地として利用されていて、墓地を造成する際にさらに削平したらしく、本来はIIIと同一の平場と考えてよいだろう。遺物はすべて近代以降の陶磁器である。

V区

調査区南西部、21Qグリッド～21Rグリッドに所在する。現況での標高は、約40mである。表土の厚さは20cm程度で、直下は未凝結砂岩の地山層である。遺構・遺物とともに検出されなかった。





第5図 III B区出土地蔵菩薩立像台座の刻書 (1/4)

(2) 遺構

SD-001 (第6図、図版3-2・3、図版4、図版5-1・2)

III A区で見つかった溝状遺構である。斜面地形に並行するように走り、東西共に調査区域外に伸びる。残念ながら中央付近がIII B区西部の平場を造成する際に削平されてしまっている。検出面の上端幅は3m~4mで西半部の方が幅広である。深さは1m~1.5m程で、これも西半部の方が深い。床面の標高は東部~西部にかけて傾斜しており、調査区の東端と西端の標高差は3mある。覆土は斜面崩落による再堆積で、数度にわたって崩落した痕跡が見られ、少なくとも1回は再掘削を行っているようである。覆土下層には硬化面が確認されており、道として利用された段階もあったようである。III B区の再堆積土中から出土した地蔵菩薩立像は道として利用された段階にその脇などに据えられていた可能性がある。なお、山側の斜面にはこの溝状遺構に沿うように幅1m~1.5m程の犬走状の平場が検出された。完全な平坦面ではなく、谷方向に若干傾斜しており、この部分を歩行するとやや不安定な印象を受ける。また、溝状遺構と同様に東部から西部に向かって傾斜しているが、標高差は0.5m程で、溝状遺構ほどではない。いずれも遺物はまったく出土しなかった。

3 遺跡の現況(第7図)

本遺跡の現況は、前述のとおりほとんどの部分が山林であるが、斜面下部を中心に一部が畠地や宅地、墓地として利用されている。今回の発掘調査と、その周辺地区的踏査結果から砦の縄張りを復元してみたい。なお、現在の国道を境として、その北側を北部遺構群、南側を南部遺構群と仮称して報告することにした。

北側遺構群(図版1-3)

調査区の北側、尾根筋がY字形に分岐する地点には現況で高さ1mを超える土壘で囲まれた平場(郭1・郭2)がある。遺跡内ではこの部分がもっとも標高が高いことから、この部分が東大和田城山砦の主郭と考えられる。郭1の平面形はやや湾曲した台形で、土壘はその台形の両斜辺と下底を巡らすもの(土壘1)と上底(土壘2)で囲まれるが、土壘2の両端は空いて郭2へ通じている。郭1と郭2の間には幅1.5m、深さ0.5m程度の浅い堀切(堀1)で仕切られている。郭2の平面形はやや背の高い台形で、土壘(土壘3)は斜辺と上底を巡るように設けられている。現状での郭1と郭2の標高差は約1mである。

郭から延びる三方の尾根はすべて堀切(堀2~堀4)で分断されている。規模はいずれも最大で、堀2が幅約5m×深さ2m~3m、堀3が幅約2m×深さ1m、堀4が幅7m~8m×深さ5mである。

北西に伸びる尾根には郭1から約5m下がったL字形の平場(平場1)があり、斜面には2段~3段の腰曲輪が見られる。郭2から北東に伸びる尾根筋にも平場(平場2)があり、その南側には1段の腰曲輪が認められる。さらにその下部に棚田が7段~8段ほど見られるが、これが腰曲輪に由来するかどうかははつきりしない。郭1・2の南側の尾根筋には幅の狭い平場が見られ、その西側には土壘状の高まりが認められたが、調査区から北に伸びる尾根道に重なる位置であるため、砦に伴う施設かどうかは疑問である。

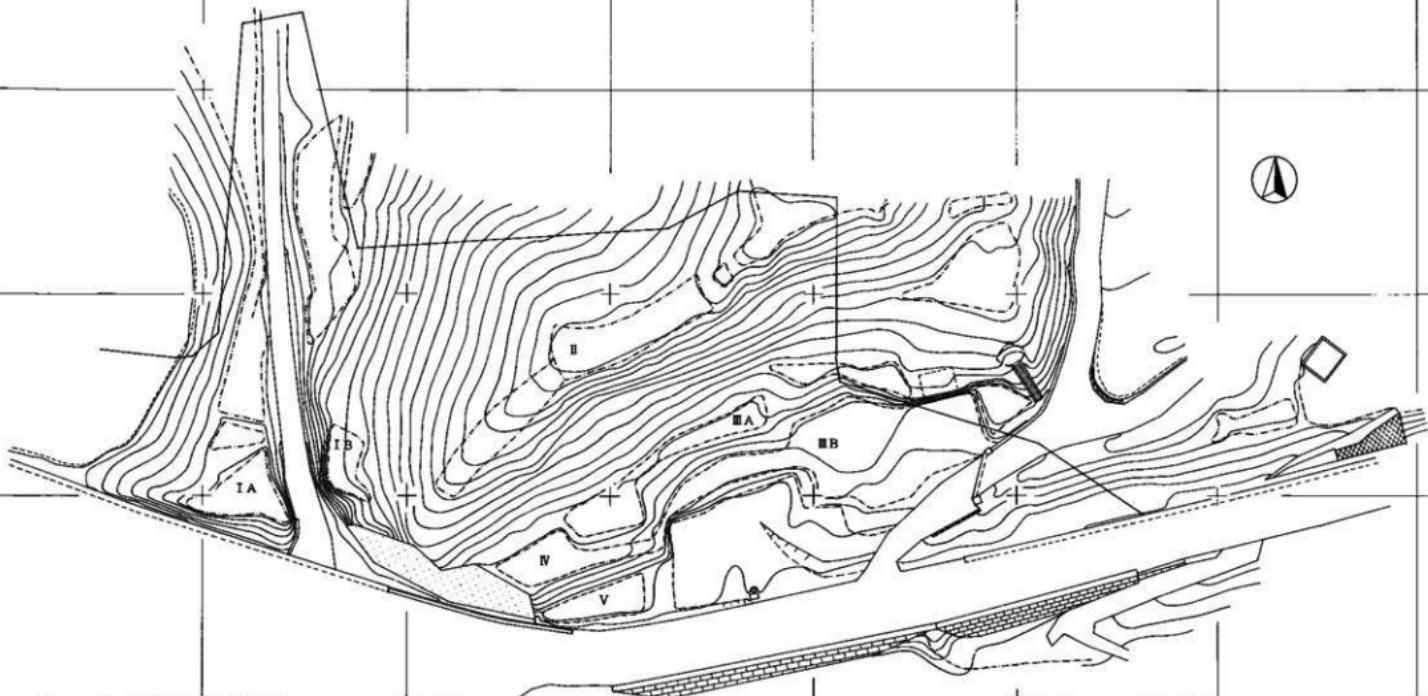
この尾根の東斜面には大規模な空堀(堀5:図版5-3, 6-1)がある。断面形は逆台形で、底面の最大幅約3m、深さは3m~5m程あるが、北側は斜面崩落により不明瞭になっている部分がある。地形に添うような形で高岩川まで続いていたものと考えられるが、南端部については別荘地や現道の造成の際に破壊されているため不明である。発掘調査により確認された空堀(SD-001/堀6)は、この空堀から分岐して斜面を巻くように南側遺構群に続いている様子が現道の法面で確認できる(図版4-3, 図版5-1)。堀6の谷側は現状では削平されてしまっているが、本来は腰曲輪状の平場が存在していた可能性がある。

尾根筋の西側にも2段~3段の腰曲輪状の平場が見られるが、最下段のものについては、八坂神社と「城山」という屋号を持つ民家が存在しており、往時から存在したものかどうかは不明である。

南側遺構群(図版2-1)

最も標高の高い地点には、L字形の比較的広い平場(平場3)がある。そこから西に延びる尾根筋は、現状で幅約3m×深さ2m足らずの堀切(堀7)で分断され、そこから狭い平場が丘陵の末端まで続いている。堀5の両側の標高差はほとんど認められない。その北西斜面には2段の腰曲輪が認められる。南東側斜面には平場3を巻くように腰曲輪があり、この北側が瘦せ尾根状に北に延びて北側遺構群へつながっている。ただ、ここも曲輪から瘦せ尾根にかかる部分付近に、現状で幅約3m×深さ2m足らずの堀切(堀8)があり、尾根が分断されている。この腰曲輪の下部の平場には応永年間(1394~1427)開基と伝えられる真言宗智山派の興源寺があり、上段の平場の西側はこの寺の墓地として利用されている。

調査区から続く堀6は現道の南側で高岩川に沿って湾曲し、国道から南側に入る市道により削られてしまっているが本来は斜面中部を巻くように掘られていたのであろう。



第6図 調査区域の現況地形図 (S=1/500)

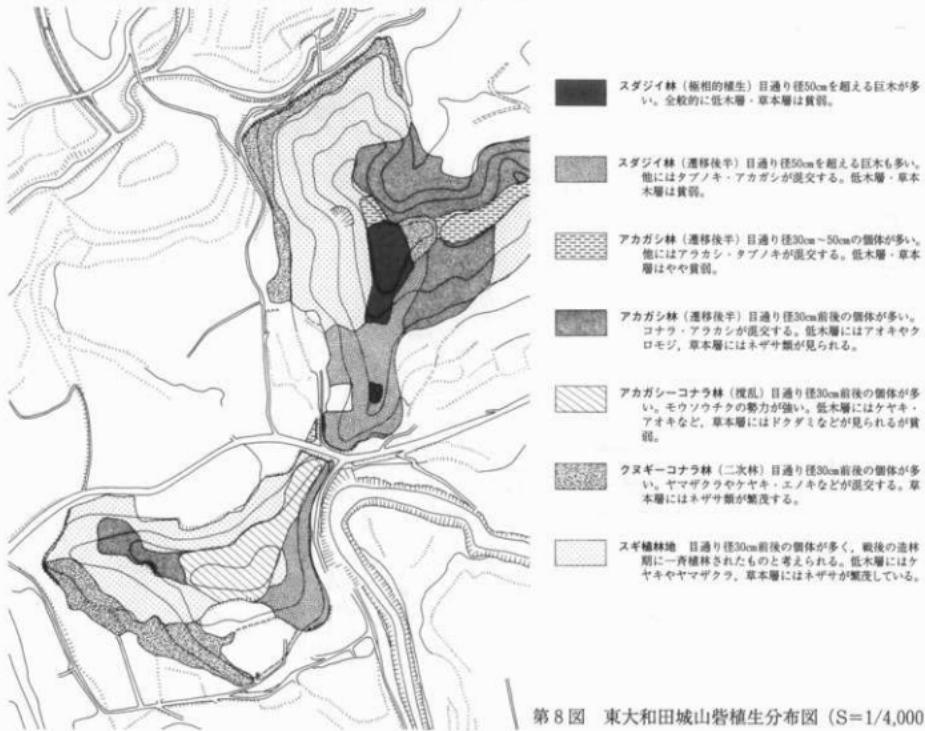


第7図 東大和田城山砦推定復元図 (S=1/2,500)

III まとめ

今回、周辺の現況の踏査と同時に簡単な植生分布調査を行った(第8図)が、それによると、狭い範囲ながら郭1・郭2の周辺と堀5の山側斜面については当地域における極相的な様相を呈しており、遷移開始後、相当の年月が経過したものと推察される。場合によると砦の廃絶以後、ほとんど人の手が加わっていない可能性もあることから、土壠など地形的に見て容易に流出してしまうような遺構が良好な状態で保存されてきたのであろう。他の部分については、多少なりとも人手が加わった状況が認められるが、現在人家や寺社、耕作地として利用されている部分を除き、比較的良好な状態で保存されているようだ。このようしたことから、今回の調査に伴う周辺の現況の踏査によって、本遺跡の構造の大勢は判明したものと考えられる。発掘調査の範囲は砦の本体部分からはかなり離れた地点の調査であり、砦に伴う遺物は出土しなかつたため、砦の時期についての資料を得ることはできなかったが、砦の周囲を巡る空堀を検出したことは、砦の詳細な構造を把握するために一定の成果が得られたものと考えられる。

課題としては、先に構造の判明した峰上城跡や、未調査の常城砦跡、この地域の周辺に存在する多数の城跡や砦との構造上の比較を通して、築城技術からみた相対的な変遷や、集団ごとの構造上の差を解明することができるかもしれない。今後の調査・研究に期待したい。



第8図 東大和田城山砦植生分布図 (S=1/4,000)



1. 調査区遠景
(北から)



2. 調査区遠景
(南から)



3. 調査区から主郭方向
(南西から)



1. 調査区から南側遺構群
(北東から)



2. 調査区から常城砦方向
(東から)



3. 調査区から関方向
(北北西から)



1. 調査区から峰上城方向
(北北西から)



2. SD-001(空堀)
土層断面A-A'
(南西から)



3. SD-001(空堀)と
犬走状遺構
(西から)



1. SD-001(空堀)と犬走状造構
(斜面上部西から)



2. SD-001(空堀)
土層断面B-B'
(北東から)



3. 犬走状造構
(北東から)



1. 現道北側法面
(南西から)



2. 現道南側法面
(北東から)



3. 堀5（空堀）の現況
(北から)



1. 堀 5（空堀）の現況
(南から)



2. 主郭北東側に所在する
富士講の祠
(西南西から)



3. 調査区北側に所在する祠（無銘）
通称「山倉さん」
(南から)



1. 祠の裏（北側）の様子
(南から)



2. 「山倉さん」の本体
(南から)

3. Ⅲ B区出土地蔵菩薩立像



報告書抄録

ふりがな	ふつしひがしおおわだじょうやまとりあと						
書名	富津市東大和田城山砦跡						
副書名	一般国道465号埋蔵文化財調査報告書						
卷次							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告						
シリーズ番号	第465集						
編著者名	城田義友						
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター						
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番の2 電話043-422-8811						
発行年月日	西暦2003年9月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北 緯	東 經	調査期間	調査面積	調査原因
東大和田 城山砦跡	千葉県富津市 東大和田字堀切275 ほか	226 016	35度 12分 56秒	139度 56分 26秒	20030602~ 20030718	3,600m ²	一般国道465号 号建設に伴う埋 蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物		特記事項
東大和田 城山砦跡	城跡	中世	空堀跡 1条		なし		皆の周囲を巡る空堀の 一部を検出した

千葉県文化財センター調査報告第465集

富津市 東大和田城山砦跡

一般国道465号埋蔵文化財調査報告書

平成15年9月30日発行

編集	財団法人 千葉県文化財センター	
発行	千葉県土木部	千葉市中央区市場町1-1
	財団法人 千葉県文化財センター	千葉県四街道市鹿渡809-2
印刷	大和美術印刷株式会社	
	千葉県木更津市潮浜2-1-10	